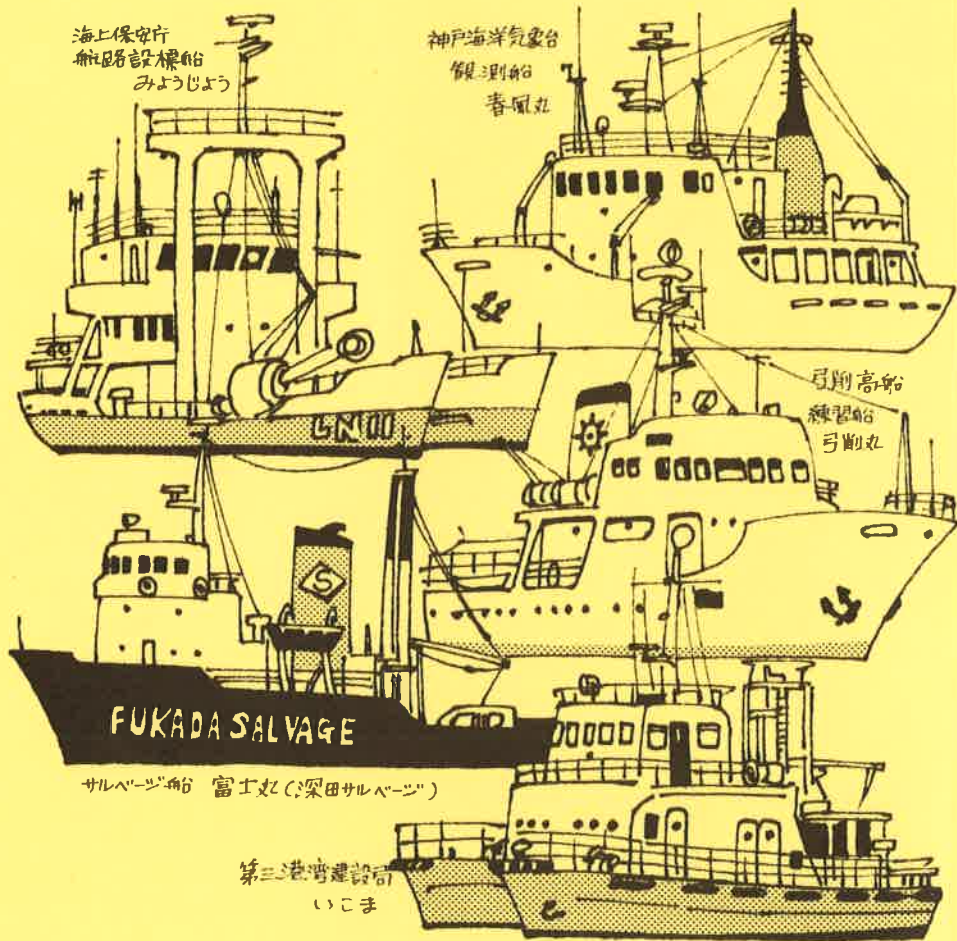


月刊・ブルーアンカー

Blue Anchor



海文堂書店 1982・3【2】

〒650 神戸市中央区元町通3-5-10

(電) 078-331-6501

目次

海文堂案内板	郷土誌の窓	“一葉の賀状から”	セピア色の港とかもめ	「諸橋・大漢和」に詫びる話
.....
13	N	元村公子	角本稔	南諭造
	11	10	6	2

『諸橋・漢和』に詫びる話

南 論造

★無気力・無関心・無感動が一般風潮になりつつある当世だから特に強く感ずるのかも知れないが、自分たちの書いたものについて何らかの反響のあるほど有難いことはない。単行本はもとより新聞雑誌などに寄稿した短いエッセーでも、またその反響の内容が厳しく批判したものであっても、著者又は筆者にとつては書いて公表した以上、何一つ反響がなく梨のツブテとなるより、どれほど張合いがあるか知れない。

なぜ、この一文の冒頭に、こんなことを書いたかと言うと、さき上梓した小著『書窓の感懐』（神戸、みるめ書房、昭54・10刊）に関連して身近かに、それを体験したからである。

この書物は、読書愛好者や図書館利用者を対象としたささやかな随想集に過ぎないが、そのなかに「私の愛蔵

者——「養之如春」のこと」と題する一篇がある。内容は作家の井上靖が処世訓にしていると云われる「養之如春」という言葉の典故を追求したものであるが、典故がもろせん文選巻四十五の班固（字、孟堅）撰「答賓戲」であることを確認するまでに十数年かかっているし、生来愚鈍不

勉強で気短かな自分としては、よくここまでサジを投げずにやったものだと思っている。典故探求の過程や明細については、文中に書いているので、改めて繰返さないが、私が何よりも嬉しく著者冥利につきると感じたのは、拙著刊行直後に谷沢永一さんが「神戸新聞」夕刊随想欄（昭54・11・12）でこの一文をとりあげ、「読書回想記の勧め」と題する書評を書いて下さったばかりでなく、昨夏出された「紙つぶて二箇目」（文芸春秋社、昭56・6刊）にも収録して頂いていることである。谷沢さんは書物批評については、地位とか権威とか周囲への差障りなど一向問題にせず附に落ちないことは忌憚なくやつつける学界異色の人である。しかも私としては、これまで一度も会ったことのない方だけに、正直に言って、大いに気をよくしたわけである。

★ところが谷沢さんの有難い書評が出たあと、しばらくして私は全然知らない方から一通の手紙をもらった。差出人は富山県立図書館のベテラン司書と思われる太田久夫さんで、文面には次のようなことが書いてあった。

へ……先日南様が昨年著わされました「書窓の感懐」を拝見させて頂きました。典故探求はこのほか興味深く思いました。このうち「養之如春」は、今から約二十年前に当時の富山県知事（注、吉田実氏、昭31〜44在任）から質問を受けました。御高著では「諸橋・大漢和」に見当らぬと書いてありましたが、当時私共一字ごとに「大漢和」を調べ、ついに第三巻の「如春」（「諸橋・大漢和」第三巻38頁、「如」の78）で探して当てた記憶がございます。この項のあとに「知事の難題」という一節があり、あわせて興味深く感じた次第です。……

丁重な書面を読んで、わざわざ昔の思い出を知らせて下さった筆者の好意に、私はすっかり恐縮してしまいました。なぜ、こんな誤りを犯したのか、私は早速著者としての不行届を恥ずると共に、ご教示に感謝する旨の礼状を差

出したが、そのときの返事に書いたいきさつだけは、自己の反省資料として機会あらば書き残して置きたいと思

った。

★「養之如春」のように漢籍に含まれていると想像される言葉の典故をさがす場合に、すぐ頭に浮ぶのは諸橋徹次博士畢生の名著「大漢和辞典」全13巻（大修館書店、昭35・5完成、改訂縮写版昭43・5刊）である。当時大阪の会社勤めをしていた私は、手元にこの大辞典がないので、大阪府立中之島図書館のレファレンス・サービスに頼ることにし、いつもお世話になる山下日出子さんととりあえず「養之如春」のうち漢字「養」と「春」を調べてもらった。何と言っても世界に冠たる大漢和辞典であるから「養」は第12巻394〜400頁210項目にわたり、「春」に至っては第5巻807〜833頁851項目にわたり、それぞれ関連字句や熟語などが解説されていたが、残念ながら「養之如春」は見当らなかつた。「春」と「養」にない以上、恐らく「之」や「如」にもないだろうと推測し、今一步の労を惜しんだことが間違いのもとであった。太田さんから教えられた私は、再び図書館に依頼して「如」の字

の部分のコピーしてもらい「如春」の項目をよく読んで見ると、案の定文末に「(班固、答賓戲)養之如春」と明記してある。したがって「諸橋・大漢和」にも見当らぬと言ったのは、明らかに私の軽率な誤りで汗顔のいたりであるが、同時にこのような大辞典は巻頭の凡例などを精読し腰をすえて綿密に検索すべきことを如実に教えられたように思った。

★それ以来私の脳裏には「諸橋・大漢和」に託びなければならぬ気持が、こびりついて離れないのである。半世紀近い宮仕えの生活から解放され自由な一市民に戻った私は、30億円の巨費を投じて面目一新、近代化した神戸市立中央図書館が昨春オープンしたのを機会に、知的好奇心の赴くまま、まるで自分の書齋のようによく利用しているが、たまたま本稿を書くことになったので、先日来改めて諸橋博士の著作や関連図書調べて見た。

「諸橋・大漢和」全13巻を落着いて手にとるのは久しぶりであったが、調べれば調べるほど、この大著の物凄い内容に驚嘆してしまった。例えば前掲「如春」を見ると語義を述べたあとに「(班固、答賓戲)養之如春」と

典故を示しているが、撰者の「班固」については同辞典7巻915頁「班」の字の一項目として、また文章名の「答賓戲」については8巻782頁「答」の字の一項目として、それぞれ簡潔に解説しているのである。私は贖罪に似た気持でこの大辞典巻頭の周到な編纂態度をうかがわせる著者の序文や凡例、さらに世紀に残る出版事業を幾多の苦難を乗り越え精魂を傾けて完遂した大修館書店主鈴木一平氏の詳密な出版後記を通読し、今更のごとく頭の下る思いがした。

★往事茫々夢の如しと言うが、私はその昔旧神戸商大(現神戸大学)昇格直後たまたま図書館視察に来学された諸橋先生(当時東京文理科大学教授兼図書館長)とお目にかかり館内を案内したことを思い出し感慨無量であった。たしか昭和七年夏頃で、場所は六甲台へ移転直前で上筒井の木造の古い校舎だったと思うが、先生は袴・羽織の和服姿で古武士を思わすような風格の持主だったことが深く印象に残っている。

私はいま図書館で借出してきたNHK編「人・その世界——スタジオ102土曜インタビュー」(日本放送出版協

会、昭52・8刊)で「諸橋轍次」の一篇(216〜232頁)を味読しているが、明治十六年新潟県南蒲原郡下田村生れで今年の六月には満九十九才にられるこの老博士が高梨英一氏のインタビューに答え最近の心境を淡々と話しておられるのを清々しい気持で読ませてもらった。

諸橋先生は、生来あまり健康に恵まれず、終戦後の二十一年には右眼失明の災いにあいながら長寿を保った秘訣は「寡欲よりよきはなし」を信条として、争わず、気が移らない、やり出すと途中でやめない性格で、規則正しく生活したためであろうかと述懐すると共に、大学教授時代と違って時間に制約されることがないので、毎日午前中は三時間ほど好きなものを好きな気持で読むが、あとは気楽に原稿を書いたり専ら自由に、楽しみで学問をやっていると話しておられるのである。

「諸橋・大漢和」にも見当らぬと書いたばかりに、このような懺悔文をものすることになったが、富山の太田久夫さんが一読者として手紙を下さったお陰で、おそまきながらこの大著を見直すと共に、その著作や関連資料を通じて、不世出の漢語学者諸橋博士の真髓に触れる機

会に恵まれたことを深く感謝しているというのが私の偽らぬ心情である。

セピア色の港とかもめ

神戸観光汽船船長 角本 稔

かもめが赤錆たブイの上に羽を休めている。昼さがりの、のどかな神戸港である。時折りランチが通り、起こした波でブイがゆらゆらりと揺れる。急にあたりが騒がしくなり、かもめが振りかえると、遊覧船の白い姿がそこにあった。



再び戻った静寂の中にかもめは、ふと昔を想った。このかもめはシベリヤ、いや広島から飛んで来て神戸の海運会社に就職、以来今日迄二十三年間港に住み、この港の一部始終を見続けて来た。その間には世の中の移り変わりと同じように、港

も大きく変わってきた。

昭和三十四年春に神戸港へ飛来したのだが、その頃は朝鮮動乱の好況も終わり不況風が吹き荒れていた。学校を卒業してさらに進学しようにも親への経済負担から、やむ無く就職の途を選ぶのも多かつたようである。しかし、その就職も簡単には行かず、造船所の職工になるのにもなかなかむづかしい状況にあって地方から都会へ出て来て就職できず、街には職を求める人があふれていた(昭和三十五年から池田内閣は高度成長、所得倍增政策を実施、景気のコ入れを図った)。三橋美智也の「赤い夕日のふるさと」や、今は亡き水原弘の退廃的な「黒い花びら」が流行したのもその頃で、三の宮は「ジャズ喫茶」、「歌声喫茶」が盛んで、店で知り合った者同志が「ハイボール」や「ジンフィズ」を飲みながら大声で歌う姿が多く見られた。

この頃の港は、現在の姿からは想像さえつかないくらい小規模で古めかしい。外国航路の貨物船や港内船にいたっても同様である。これはあの高度経済成長期を体験した我が国どここの港でも、大同小異の経過をたどったのに浮かんでいて貨物船が停泊していた「ブイ」。

しかし小規模で古めかしい港ではあったが、そこには港の隅々に働く人々の、ほのぼのとした生活の臭い漂う姿が、そこかしこに見られた。港といえば船足深く貨物を積み入港する大型船が主役のように思われがちだが、角度を変えて観察すれば、あながちそうでもないのである。たとえば舢舨、タグボート(曳き船)、ランチ(通船)パイロットボート(水先案内船)、繫船(貨物船が入出港の際、船からのロープを渡す役)、沖売り船等もかつては隠れた主役であったかも知れない。

特に舢舨は昭和三十年代から四十年代にかけ需要が高まった。簡単な倉庫替りやトラックの役目で、港と瀬戸内の貨物輸送に不可欠となり主役として表舞台に登場したものだ。櫛の歯のような型をした各突堤の隅々にある、中の島(兵庫)、国産波止場、中波止(メリケン波止場の西側)、京橋、葺合港湾には海面を埋めるがごとく無数の舢舨が群がっていた。そのほとんどが木造で、古くから残っている「猪き」(船首が猪の鼻に似ている)、運炭船(かつて北九州若松から阪神へ石炭運搬に使用さ

ではないだろうか。

ここでは昭和三十四年以後建設された幾つかの代表的な港湾施設を消すことによって、その当時の港を再現してみよう。

その代表的施設に「ポトピア81」が開催された。かの有名な「ポトピアランド」があげられる。現在建設中の「六甲アイランド」も無論そうである。「ポトピアワー」、「神戸大橋」、「ポトピア大橋」、「東へ行けば「摩耶埠頭」、「第一、第二摩耶大橋」、「神戸フェリーセンター」、「東部埋立地」、西へ向かえば「須磨ヨットハーバー」、「土砂積み出し場」、「海釣り公園」等、驚くばかり沢山の施設が消されたことになる。これは現在「近代的神戸港」のキャッチフレーズのものに、その中核をなし、フル活動を続けているものばかりである。

眼をつむるとセピア色の景色の中に懐しく浮かびあがってくる施設もある。それは赤いネオンが灯り港の名物であった「川崎造船所のカントリークレーン」や、港の沖に張りめぐらされていた「長い防波」、今以上無数

れたずんぐり型)、「だんべい」(大阪港等の川筋で使用され橋の下が通り易くするため全体を低く平な型にしてある)、で大きさは百しから三百五十しと小型。機関は無く曳き船との間をロープで結び曳かれて行く、専門的には雑種船と呼ばれた。雑種船は普通の船舶とは違い、海運局の船体検査や船員の難しい資格試験がなかった。比較的同時でも乗れるものと思われがちだが、船員(船頭と呼ぶ)には様々な操船術、積み荷の勘がそれなりに必要とされた。

今も眼に浮かぶのは、船頭さんやその家族の水上生活の姿である。デッキで遊ぶ幼な児達、胴の間(舁の積み荷場)の上に満船飾のごとく張られた洗濯物、飲料水を求めドラム缶二、三本を積み揺れながら岸壁の給水栓へ向う伝馬船、陽が暮れて街に灯りがともる頃、家族連れで洗面器をかかえ銭湯と行く楽しそうな姿である。夜は電燈も無く、石油ランプの薄明りのもとにおよそ文明とはほど遠い不自由な生活を送っていた。

その頃の港で一番早く活動を始めるのは曳き船で、朝六時半前のまだ暗いうちからスタンバイをし、いつせいで今日も巨大なクレーンが並ぶターミナルには、さながら航空母艦のような船がコンテナを満載して着岸する。広大な敷地には、コンテナを曳いたトレーラーや、高足カニのようなストラトルキャリアー(コンテナ運搬車)がせわしく動き回っているだけで、人陰は見えない。さながらコンピュータで動く工場である。これも「港の近代化」のかけ声のもとに他港との貨物争奪戦にしのぎを削り、勝ち抜いて行くためには仕方のないことか、いやその結果かも知れない。人が機械を動かす、いつの間にかその機械に人が動かされている。近代化とは淋しいもの、あの港の人々の営み、人情やロマンはどこへ行ったのであろうか。

港めぐりの遊覧船から子供達の歓声が風に乗って聞こえてきた。その声で現実にはひき戻されたかもめは、辺りを見回し、ほっとため息をつきブイを飛び立った。

どんよりとした冬の雪間が切れ、一筋の光がさし込んできた。波がきらりと輝き、かもめに「新しい港の時代が訪れているのだよ。」と答えているようであった。

に機関を回わし始める。蜘蛛の子を散らすように舁溜りへ急ぎ、沢山並んだ舁の中から目的のものを探し出し、ロープを繋ぎ引き出す。多い時には二列で八隻と数珠繋ぎにし、三十分から一時間かけて岸壁や、沖のブイに停泊中の船へ着けるのである。

少し遅れて七時頃、国産波止場が賑わってくる。貨物船に乗り込んで深い船倉や、舁の船倉において貨物を動かす。通称アンコと呼ばれる労務者が集まって来るのである。現在では社員となり、身分を保障される人がほとんどだが、当時は一日の仕事にありつけば良しとする、その日暮しの人が多かったのだ。

昭和三十四年より摩耶埠頭、昭和四十一年よりポートアイランドの建設が始まり、次々と完成を見て来た。四十年代末に襲ったオイルショックがさらに追い打ちをかけ、舁は四十五年の千七百隻、四十六万しをピークに、その後買い上げが始まり、木造は人工島で焼却、鋼鉄の舁はスクラップ、と次々に消えて行った。舁の船頭さんは故郷へ引揚げ、曳き船の乗組員は陸上勤務へ配置転換、アンコも浮き草のように、いつの間にかどこかへ消えた。



二葉の賀状から

元村公子

高校時代の同窓会名簿を見ると、旧性と結婚後の新しい姓名とが記載されていた。その中に、Oさんの旧姓がかっこ内にあり、新しい姓、へ辛としてあった。ふと、あー、Oさんも結婚されたのかなーと思った。が、その考えを打ち消すのに時間は要らなかった。朝鮮人の彼女は、仮りの日本名から、本名の朝鮮名へ辛にもどったのだ。そうにちがいない、と強く思った。

何となく、清々しく、彼女への賀状に本名のへ辛と認めた。(卒業後、始めて出す賀状であった。)彼女と私とは特に親しい間柄ではなかったが、彼女ははずば抜けて優秀な成績だったし、人柄も柔和だったので人望もあり、目立っていた。彼女と親しい間柄だった、私の友人Aさんにさそわれて、一度彼女の家に遊びに行ったことがあった。その一画は朝鮮人ばかりが住む集落だったと記憶している。そして、家とは名ばかりで、バラックだった。

郷土誌の窓

「神戸港ガイドブック」の新版が刷り上がった。海と船を商売にしている私たちには、待ち焦がれていた新版だ。二年ぶりにこの本を手にして、神戸港の進展に目を見はる思いがする。六甲アイランド東海上から撮った一枚の写真は「港湾都市・神戸」を見事にとらえている。内容は、港関係の官庁や外国公館の所在地一覧(イラスト・マップ付き)にはじまり、各航路船の細かい案内がつづき、道路網や内航フェリ・客船の紹介、神戸港の港勢とつづく。そのあとに、港区ごとの港湾関係会社が入った地図と、神戸港関係先一覧が収められている。日常取引いただいている船具店のいくつか、ポートアイランドに移ったが、その新しい住所・電話もこの本には記載されていて、大変重宝だ。一般にはなじみがうすいかも知れないが、ミナト・神戸を知る貴重な一冊の本である。神戸港振興協会発行、定価一五〇〇円。

* * *

三月上旬には、郷土誌関係できわめて貴重な本が上梓

その後、彼女から、賀状の返事と近況を知らせる電話をいただいた。そして今、彼女とは故郷時代より、より親しい友人関係にある。彼女は高校卒業後、国立看護学校で勉強し、助産婦の資格を得、更に神戸大学に学び、朝鮮学校に勤めて、今は府の職員だと聞く。〃さすが〃と思った。そこには、朝鮮人であることを、ひたかくしにするかつての彼女はいなかった。

この三月、彼女と、春日野市に住む、Aさんとが我家に集うことになった。Aさんと彼女とは中・高時代、親しい友人だった。が、Aさんもここ十数年親交のなかった彼女に久しぶりに会える日を心待ちにしている。一葉の賀状から、こんなうれしい日がこようとは……。

今、机の上に、読み終えた李恢成の「またふたたびの道」がある。作者自身の投影だと思える、主人公の哲午と、彼女とが、私の中で重なってくるのはなぜだろう。

される。たぶん、この「ブルーアンカー」が店に並ぶころには、新聞紙上で大きく取りあげられ、話題になっていくことだろう。「郷土資料総合目録」(兵庫県公共図書館所蔵・昭和56年1月現在)がその本である。兵庫県図書館協会の編集で、ジュンク堂書店より発行される。

今回発行される「郷土資料総合目録」は、昭和36年に刊行された「兵庫県公共図書館所蔵 郷土資料総合目録 昭和35年11月30日現在」を受けた新版で、三六〇〇タイトルの36年版に比べ、収録資料数は八八六六タイトルにものぼっている。膨大な収録数は、この二十一年間に郷土関係図書の発行がどの時代にも増して隆盛であったことを物語るとともに、この在所目録への期待を一層増大するものである。

内容は、文書・記録・絵図の部(三三三タイトル)、新聞・雑誌の部(一三三タイトル)に大別され、図書の部は日本十進分類で編成されている。巻末に50音順書名索引がついているので本文への検索も便利である。

この目録の作成については、私たちが「神戸図書ガイド」という小冊子を作った後間もなくして、人づてに聞

いてはいたが、今こうして発行の運びとなったことは本
当に喜ばしい。図書館だけでなく、広く本に関わる人
たちにとって必携の書であると思う。定価は送料込みで
八〇〇〇円。ジュンク堂書店(電・三九二一〇〇一)
にて販売。

* * *

県内の釣りの本も何冊か発行されているが、このほど
『兵庫の池・川釣りガイド』(九八十円)が神戸新聞出
版センターから発行されて、釣りファンに喜ばれている。
ポイントの図や写真も豊富で、しまい込んだ竿に手をか
けて、汽車に乗り、バスを乗りついで行ってみたい気にな
る。「いつも気ばっかりやんか」と言われても、こうい
う本を見ると水の流れる音が聞こえてきそうで、心は騒
ぐ。一二〇ポイントの最新情報が入った待望の一冊だ。
巻末には神姫バスの路線名が入っている。

* * *

日本経済新聞社から『神戸の中堅一五〇社』(一五〇
〇円)が二月に刊行された。この本は好評だった昭和五
十二年の『神戸の中堅一〇〇社』、五十四年の『神戸の

中堅一三〇社』を受けた増補新訂版である。中西平四郎
・日本経済新聞神戸支社長の「まえがき」によると、「
掲載企業は前回、前々回の方針を厳密に踏襲し、兵庫県
下の日常の取材先企業群のなから、非上場、経営のユ
ニークさ、過去の業績がすぐれていること、特に近年で
は黒字基調を続け、成長性の期待できる企業であるなど
一定基準以上の企業を対象として選びました」とある。
今後の神戸経済を左右する企業群の生きた情報がパツク
されたこの本は就職情報として読むこともできる。

* * *

社会法人・兵庫県自然保護協会の発行物をお預りして
販売することになった。同協会の会誌「兵庫の自然」
(季刊)のバックナンバー全点のほか、次の冊子を委託販
売しています。兵庫県の自然・動物・植物の保護に関心
をお持ちの方は当店でごらんの上、お求め下さい。小
中・高校生の自然観察の手引書としても役立つ内容です。
販売している冊子の書名は次の通りです。

『自然かんさつ学入門』(35P)三〇〇円
『自然観察指導の48手』(48P)三〇〇円

『川の自然かんさつ』(36P)二〇〇円
『草はらの自然かんさつ』(36P)二〇〇円
『兵庫県の蝶』(44P)五〇〇円
『兵庫県の猿』(40P)一〇〇〇円
『兵庫県のもみじ』(36P)五〇〇円
『共存者のゆくえー兵庫県の自然・その現状ー』(40
P)二〇〇円

『神戸の化石と化石産地』(62P)四〇〇円

※『奇形猿の叫びー早期解明の訴えー』(36P)

※『尼崎市猪名川自然林の保全』(39P)

※『尼崎市武庫川河川敷の自然回復・利用計画に関する
調査報告書』(98P)〔※印は在庫なし〕

* * *

新聞記事から目についた本を紹介しておこう。二月

日の「赤旗」紙上に小冊子「丹生」が発行されたことが
報じられている。記事によると、この本は「神戸市北区
にある丹生山塊の自然と文化を守り育てようと、作家の
村山悠さんをはじめ同区山田町、淡河町の地元の人びと
と、神戸市周辺に在住する有志が一九七八年(昭和五十

三年)末に「丹生文化を育てる会」を発足させ、十数年
間にわたって調査、研究、記録してきた成果と運動の紹
介を「はがき」に印刷した機関紙「丹生」一号(七九年
三月一日発行)から八一年十月一日の三十二号までをま
とめたものだ。最近も元町駅で兵庫県勤労者山岳連盟
の人たちから「神戸の秘境、丹生の自然を守ろう」とい
うチラシをもらったところ。車中で読んで関心を持った。
この「丹生」はB6判六四ページで三百円。お問い合わせ
せは、兵庫県勤労者山岳連盟(芦屋市業平町
6時半〜9時半)まで。

(N)

海文堂案内版

★オープン以来開催してまいりましたサイン会も二月十三日の筒井康隆さんをおもちまして好評のうちに終了いたしました。

尚、サイン会とは別に「サイン本」のミニフェアを階段昇り口横で開催中です。お立ち寄りください。
★児童書ゾーンでは「指輪物語」で知られるJ・R・R・トールキンの図書をそろえて「トールキンの世界」を現在開催しています。子供から大人まで楽しめる雄大なファンタジーの世界にお立ち寄りください。

★東入口前のブック・プラザでは「岩波新書フェア」に続いて、三日からは「猫の本フェア」を予定しています。どんなネコがとびだすか。お気に入りのネコにきつと出会えると思います。楽しみにお待ちください。

★二階ギャラリーでは、次の通り新しい企画を準備し

ています。

◆三月一日～十日「アムネステイ・ポスター展」
◆三月十一日～十九日「ヨーロッパ秀作版画展」

(ARTES社提携記念)

◆三月二十日～四月二日「アンドレ・ブラジリエ
日記念」

◆四月三日～十三日「大野晴義個展」(油彩・デッサンを中心として)

★英語検定の受付も間もなく始まります。まだ用紙が届いていませんが、一階インフォメーションまでお問い合わせ下さい。三月下旬には到着の予定です。

★科学技術文書の翻訳は何でもご相談ください。リライティングや科学技術通訳のご相談にもエージェンツトとして対応してまいります。取扱言語は、英語、フランス語、ドイツ語、アラブ語、スペイン語、ポルトガル語、その他です。お問い合わせ、ご相談はインフォメーション・小林までお寄せください。